

川村学園女子大学 国際英語学科
2016 年度 「児童文学英訳コンテスト」

【課題作品】 上橋菜穂子『天と地の守り人〈第一部〉』（偕成社、2006年）

あらすじ：

女用心棒バルサがかつて命を救った新ヨゴ皇国の皇太子、チャグムは、強大なタルシュ帝国の侵略から国を守るため、近隣のロタ王国やカンバル王国と同盟を結ぼうと奔走していた。しかしその途上、チャグムは敵に追いつめられて海に飛び込み、生死不明となってしまう。その知らせを聞いたバルサは悲しみに沈みながらも、日々の稼業を送っていた。

しかしある日バルサに、新ヨゴ皇国の帝の衛士〈狩人〉の一人であるジンから、チャグムが生きてロタ王国にいるかもしれないことを知らせ、彼を探し出して救ってほしいと依頼する手紙が届く。バルサはただちにロタ王国へ向かい、チャグムがロタ南部の大領主スーアンのもとを訪れたことをつきとめる。またバルサは、ロタ王の情報員「カシャル〈猟犬〉」たちの頭領、アハルと出会い、チャグムがロタ王の弟イーハンに会うために北部へ向かったことを知る。

一方、呪術師のタンダは、この世界に大きな異変が起きようとしているのを感じていた。かつて彼とバルサが助けた兄妹、チキサとアスラが訪ねてきたとき、異世界を見る能力をもつアスラもその異変に気づいていることをタンダは知る。しかしその直後、タンダは新ヨゴ皇国の徴用にあい、雑兵として戦地へ送られてしまう。

チャグムの足跡をたどるうち、バルサは、彼が巻き込まれている動乱が、タルシュ帝国の内部抗争やロタ南部の大領主たちの国王に対する反逆など、多くの要因がからむ複雑で大規模なものであることに気づく。彼の身に刺客が迫っていることを知ったバルサはひたすらチャグムを追う。

『精霊の守り人』に始まったバルサとチャグムの物語、その完結編第一部！

【課題文 1】

チキサはちょっとてれくさげな顔をして、こんどは、油紙の包みをさしだした。

「あの……これは、おれが都で買ったんです。はたらいた金が、すこしたまったから、その金で。」

油紙の包みのなかに、さらに笹の包みがあり、それをあけると、なかからホウロ（豆をすりつぶして発酵させ、塩味をきかせたタレ）に漬けこんだ肉がでてきた。

「おっ、こりゃあいい！ うまそうだ！」

タンダは、およろこびで、チキサに礼をいった。

「ありがとうよ。さっそく焼いて食おう。」

マーサの店ではたらきはじめているといっても、奉公見習いの身分では、まだ、それほどの賃金はもらっていないだろう。そのわずかな金で、こんなおみやげを買ってきてくれたチキサの気もちがうれしかった。

山菜鍋が煮えると、タンダは鍋を火からおろして、かわりに足つきの網を火にかけた。そして、ホウロ漬けの肉を、その網にのせた。

ジリジリと音をたてて肉が焼け、あぶらが炭に落ちるたびに、ジュッと小さな音がして、こうばしいにおいが家じゅうに満ちる。

やわらかくて、味がよくしみた焼肉と、ほっかり炊けた飯と、あたたかい山菜汁を、タンダはふたりによそってやった。

チキサは夢中で肉にかぶりつき、飯をかきこんでいる。

アスラは、はじめ、ゆっくりと汁をすすっていたが、やがて、すこしずつ顔に血の気がもどりはじめると、焼肉にも手をのばし、おいしそうに食べ始めた。

夕食を食べ終わるころには、アスラの顔は、目にみえておだやかになっていた。

(pp. 120-121)

【課題文 2】

アハルは、じっとバルサをみつめた。

「あなたは、小舟にのって逃げたといったわね？ ……でもね、火事をみに河岸にでていた見物人が、ひとりではなくて、ふたりの人影が小舟にのるのをみた、とっているのよ。」

バルサは、だまってアハルをみていた。目の前の女性と、あの襲撃を指揮した者との印象が、ゆっくりとかさなつた。小鳥のような外見の下に、するどい洞察力をもつ女性がいる。

アハルの頬にはあかみがさしていたが、口調はあくまでもおだやかだった。

「あなたは、オグハルを殺した男と小舟にのって逃げたのでしょうか。仲間たちが、あなたをみつけたときも、オグハルを殺した男は小舟にひそんでいたはずだわ。——なぜ、タルシュの密偵をかばったの？」

バルサは、ごく平静的な声で、こたえた。

「彼が、わたしの命をすくったからです。わたしは薬をもらって、身体がしびれていた。あの火事のなかでほうっておかれたら、焼け死ぬところだった。」

アハルは、かすかに顔をしかめた。

「でも、あなたはオグハルの遺体をみたはずでしょう？ カシャル〈獵犬〉を殺したタルシュだとわかっていて、なぜ、かばったの？」

バルサは、アハルをみつめた。

「わたしは、命の恩をかえしただけです。あなたがたがはなつた火で、わたしは死にかけていた。もし、わたしが、ひとりで、あの建物から河に逃げようとしたら、オグハルという人は、わたしを弓で射なかったでしょうか？」

アハルは、なにかいいかけて、口をとじた。それから、つぶやいた。

「——射たでしょうね。」

大きくため息をついて首をふると、アハルは顔をしかめた。

(pp. 243-244)

【課題文3】

風にのって、前方からひづめの音がきこえてきた。

降りしきる雪の彼方に二騎の影がみえる。追いつがっていく馬上の男の手に、刀がひかっていた。

「チャグムー！」

ほえるように、バルサはさげんだ。そして、腕をふりあげるや、鞍の上で背をしならせて、矢をはなつように短槍をなげた。短槍はうなりをあげて飛び、追手の背にせまった。さっと、追手は身体をねじって短槍をよけ、短槍は馬の首をかすっていった。

馬は悲鳴をあげてたおれたが、馬上の人影は鞍の上からしなやかにとびあがり、宙で一回転して地にとびおいた。そして、背後のバルサには目もくれず、なにかをチャグムの馬めがけてなげた。

チャグムが、地面になげだされるのがみえた。もがくようにして立ちあがったチャグムのもとへ、男がかけよっていく。

チャグムは腰の剣をぬきはなち、身体の前でかまえた。そのせつな、男の刀がふりおろされた。

耳ざわりな音がして、チャグムの剣がまっふたつに折れ、血しぶきがとんだ。

バルサは馬上に立ちあがり、鞍をけっちはねあがると、肘をふりあげて、刺客の上にとびおいた。刺客は身体をねじり、とっさにバルサの肘が脳天を直撃するのをさけた。ふたりはもつれあって地面にころがった。

(pp. 322-323)

【登場人物紹介、および人物名等の英語表記例】

バルサ (Balsa) : 女用心棒。短槍使いの達人。

タンダ (Tanda) : 呪術師 (男性)。バルサの幼なじみ。

アスラ (Asura) : タルの民の少女。過去の事件の影響で口がきけなくなっている。

チキサ (Chikisa) : アスラの兄。

マーサ (Marsa) : バルサの知人で、織物商を営む女性。アスラとチキサの面倒をみている。

アハル (Ahal) : ロタ王に仕える情報員「カシャル〈獵犬〉」たちの頭領 (女性)。

カシャル〈獵犬〉 → a Kashal (hound)

オグハル (Ogahal) : アハルの部下 (男性)。タルシュの密偵との戦闘で死亡。

※上記以外の固有名詞は、原則としてローマ字表記とする。